同窓會報

都立大学附属高校
同窓会機関誌
発行所　目黒区八雲
1-1-2附属高校内
新制同窓会
(723) 9966
責任者　堀内茂男
編集者　野口貞義
岡田晴道

新名簿発刊に当たって

同窓会会長　内野滋雄（一期）

いよいよ最新版の名簿をお届けすることができる。この間、再三にわたる調査、連絡、校正等々、多大のご苦労をおかけした同窓諸氏に、心から御礼を申し上げる次第である。

前回にも申し述べたが、同窓会の仕事の一つに、可能な限りの詳しい名簿を発行することがある。名簿の効用は、同年代の友人達の状況が把握できることの他に、自分の周辺に年代の違う同窓生を発見することである。

それらの点からしても、住所、勤務先は当然のこととして、勤務先の部課や役職など、細かい情報を提供したいと思っている。それについては、現在の職場や役職が必ずしも満足でない場合を想定して、根強い反対意見がある。それもわからないわけではないが、そういう場合にこそ同窓を頼る必要もでてくるので、私としてはできるだけ細かい名簿を作りたいと考えているわけである。同窓生の皆様のご賛同をいただき、次回あたりから実現したいと思っている。

従って、地域別の他に職業別の索引も欲しいのである。職種によっては販売などの拡張に役立つであろう。

我が校の源は、昭和四年、旧制の府立高等学校創立にさかのぼる。そして戦後、昭和二十三年に尋常科が新学制制度によって、東京都立新制高等学校に移行したのである。この頃、一学年八十名の尋常科は廃校にするか、又は、近くの旧制中学校と合併するとのうわさが出た。先生も在校生もこぞって存続を願い、曲折はあったが今の形になり、四十年を経過したわけである。

昭和二十五年、旧制の都立高等学校（創立当時の府立高等学校）は廃止され、そこに都立大学が誕生した。旧制の都立がそのまま都立大学となったわけではなく、別のものという見方が正しいと思われる。旧制の高校の方は後継者（後継校というべきか）がなく、最後の尋常科三年（都立大府属高校二期生）をもってとだえている。旧制高校としてはいずれは適当な後継者を見つけて、同窓会の事務処理や基金を移さなければならない。まだ先の話ではあるが、校旗、校章、校歌をそのまま受けついでいる都大付属があとを引きうけるべきだと考えている。その考えがあるために、名簿のスタイルは旧制のものに合わせてあるが、内容は少しく異なる。先程も述べたように勤務先の役職は旧制にはあるが附属にはない。職業別の索引もそうである。

しかし運動部などでは、新旧の交流が盛んなところもあるようである。又、附属の人が旧制の名簿を手に入れ、仕事に活用している人も少なくないようである。役に立つからであろう。

現在、昭和五十九年度版の旧制の名簿が二百部程残っている。この問題に興味のある方は左記に申し込んでいただきたい。料金は名簿到着後に、名簿の末尾に折込んである払込用紙で、三千円を払込んでいただければ結構である。その場合、附属高の何期生かを明記願いたい。これを機に、新旧の交流が更に進むことを願って止まない。

記

〒152 東京都目黒区八雲一ノ一ノ二
都立大学附属高等学校内
府立高等学校同窓会

訃報

元都立大学附属高等学校教諭、同窓会顧問の斉正子先生が、昨年十月十二日、逝去されました。

先生は、昨年五月二十七日夜、ご自宅の前で、脳出血で倒れられ大森日赤病院に入院されましたが意識不明のまま、十月十二日逝去されました。

翌十三日お通夜、十四日に告別式が、世田谷区野沢竜雲寺でとり行なわれ、先生方や同窓生、約千名が参列されました。

十一月二十九日、名古屋にて納骨。ご遺族は、お兄様の斉薫氏。住所は、〒451 名古屋市西区菊井2の21の8

頁を開くと、青春がよみがえる
東京都立大学附属高等学校
『同窓会名簿』昭和62年版 完成!!
第1期～第39期生名簿、氏名索引、クラブ・サークル別名簿、校歌、寮歌、記念祭歌集
B5判・368頁・無線とじ　頒布価格二、〇〇〇円(送料とも)
同封の振替用紙でお申込みください。

附属高校の昨今

工藤好吉（教諭）

附属高校に一番長く勤めていることになる私に、何か附属のことについて書いてくれということで、思うままに拙い筆を走らせている次第です。私は二十九年に附属にお世話になって以来、二十二年経過したのです。年月のたつのが早いと、今更乍ら驚いています。

校舎は立派とはいえませんが、近代的な建物、昔の面影はなくなっています。中庭にある『欅』は、過ぎし日のことすべてを潜めているかのように、元気に枝をはっています。またキャンパス約二万坪を囲んでいる、コンクリートのフェンスだけは昔そのままです。教師も殆んど変わり、私のような古い人間は、早く去らねばならない時期に来たような気もします。

初代校長森脇先生以来、現代の増田先生は十三代目の校長です。卒業生数は今年三十七期まで、八六三八名と、間もなく一万名になろうとしています。その間、小笠原校長はじめ、片山（物理）、鈴木（英語）、畠田（国語）、児玉（社会）、三浦（数学）、松岡（美術）、綱島（英語）諸先生が逝去され、一昨年の八月に松先生が急逝され、また、昨年は斉先生が逝去されました。逝去された先生、退職された先生、大学へ他の高校へと変わられた先生方、各代の校長、現職の先生方で一三三名の多数にのぼっています。現職の教師は三十九名内女教師九名と中規模の学校として、よき伝統を守るべく努力しています。

一昨年より先生方の強い反対がありながらも、強制人事が実施されるようになり、民主的な希望と承諾の人事も消え、強制的に移動させられるようになって、いろいろ弊害が出ているようです。本校の教師もその影響をうけ、大幅に変わって来たのです。この強制人事により、より良き方向に変革されることを願っています。

現在の生徒数は十八学級、男女半々八六四名です。最近の生徒は附属校の生徒としてのプライドが欠如しているように思われます。現代の若者の趨勢かもしれないが、残念に思われてならない、自己中心的であるのも、このあらわれかもしれません。いろいろな面で大幅に変わって来ているのが現状です。

もっと心配なことは、大学が六十六年四月に移転することに決定しています。附属高校がどうなるかはまだ決定していません。附属高校の移転する敷地はありませんので、現在の場所に残るより仕方ないのです。大学の移転を契機に、附属高校のあり方を含めて大きな問題をかかえているのです。

伝統ある記念祭は内容、質こそ異なりますが、生徒諸君は毎年情熱を傾けております。よい面の伝統を持続させるべく努力することは、現在の教師のつとめかと思っています。

卒業生の皆さん、母校のために、ご尽力をお忘れになりませんよう、お願いいたします。

墓前に記念祭歌

故松俊夫先生の一周忌が、昨年八月二七日、めぐってきました。

二四号会報の追悼文で「命日には、記念祭歌を手向ける」と約束した吉田泰三君（二期）の弔意に共鳴する有志が、二六日夜、菩提の光源寺の墓前に集い、吉田君とともに、故人が特に愛唱された第一六回記念祭歌『闇の夜に』を斉唱しました。

時ならぬ歌声は、近隣の仏の眠りを妨げたかもしれませんが、近時移り住まれた真新しい墓碑の主のお披露目の挽歌として、許していただけたでしょう。先生も、草葉の陰で微笑ののち、唱和しておられたことと思います。

因みに、光源寺は、文京区向丘二―三八―二二（電・八二一―一一八八）で、都営三田線白山駅下車、徒歩五、六分です。

（編集部記）

松岡先生奈良展後日記

加藤武利（1期）

『近代奈良異色画家展』は、好評のなかで一ケ月の展示を終えました。地元の新聞の批評の一部を御紹介します。

朝日―松岡は、漆と鉱物性顔料とで作った絵の具を使った彩漆画の手法を編み出したことで知られる。伝統的な漆絵を工芸から切り離し、漆絵を近代絵画として確立しようと情熱を燃やした。「デッサンの松岡」と呼ばれたほど、確かな描写のデッサンでも知られた。

読売―新発見を含め百二十五点を展示……漆絵を絵画として確立させた功績は大きい……。「デッサンの名手」といわれ……。

毎日―昨秋、偶然見つかった裸婦デッサン、力強い量感に満ちた描写はこの人の強烈な才能を感じさせる。

奈良―出品作の半数を占める六十五点は、松岡（明治二十七年―昭和五十三年）の作品。宇陀郡榛原町の出身で、東京で活躍した。デッサンの名手として知られ、旧制中学の教科書にも掲載されていた。画風はオーソドックスな洋画から抽象画に移り、晩年はまた写実に戻った。……

いずれの新聞も先生を郷土の誇りとして、高く評価しています。

二人の海女（1934年）

松岡先生の後任として都立大附属高で十年間教鞭を取られ、現在奈良教育大学教授の鈴木寛男先生には、この展覧会で、広く県民に先生の業績を紹介するため、公私に亘って、御尽力いただきました。

奈良県庁のロビーには、漆絵の大作『たつたの紅葉』が飾られていて多くの県民に親しまれています。一昨年奈良県の若草国体に来られた天皇が三輪山の三輪神社に立ち寄られた時、松岡先生の彩色蒔絵衝立『飾馬』に目を止められ、作者の名も尋ねられ、神社にこの作品を大事にするように言われたことが県民に伝わり、先生の作品は、県の宝のように扱われています。

私は、先生の作品を故郷の奈良市と、先生が居住されていた世田谷区の美術館に二つに分けて所蔵していただくつもりでした。しかし今回の美術展を機に、奈良に作品のすべてをお渡しすることが、先生の意に添うものでないかと思うようになりました。私を始め同窓の諸兄姉には、今後先生の作品を身近に見ることができなくなりますが、上述の理由から、私の判断を御理解くださるようお願い申し上げます。

先日お知らせしました先生のデッサン集は、美術評論の第一人者である河北倫明先生に、御子息が同窓である御縁もあって、解説をお願いしました。その原稿をいただき次第発行の予定です。

その後、松岡先生の作品は次の各展覧会に出品、展示されました。

『写実の系譜II　大正期の細密描写』
東京国立近代美術館
昭和61年10月20日～12月7日
京都国立近代美術館
昭和61年12月16日～昭和62年1月25日
出品作品

『素描芸術百年の歩み』
〝人間像をテーマとして〟
奈良県立美術館
昭和61年10月10日～11月9日
松岡先生以外の主な出品者

日本画　菱田春草、竹内栖鳳、上村松園、速水御舟、村上華岳、前田青邨、鏑木清方、平山郁夫、加山又造　他

洋画　黒田清輝、藤島武二、青木繁、岸田劉生、岡田三郎助、関根章二、藤田嗣治、安井曽太郎、寺内万次郎　他

遅きに失した感がありますが、松岡先生の名が、世に高まりつつあることは、大変嬉しいことです。

『老婆』　一九一六年作
『落日の風景』　一九一七年作

『斉先生の遺稿と追憶』の編集進む

斉先生の遺稿と追悼文をまとめた、『斉先生遺稿と追憶』が、先生の一周忌の発行を目指し、先生が卒業された女高師、初めて教鞭を取られた京華女学校、都立の旧制、新制の同窓生有志からなる、刊行委員会の手で、編集が進められています。

『斉先生遺稿と追憶』の購入を希望される方は、ハガキで……

〒188田無市西原町4の4の34
1の508　牧原憲夫方
『斉先生遺稿と追憶』刊行委員会
事務局

宛お申込みください。定価は未定。

尚、都立大学附属高校関係の編集委員は次の通りです。（敬称略）

伊藤邦幸（編集長）　旧制2期
堀内茂男　4期
小中陽太郎　13期
牧野憲夫　13期
森田尚人

13期の 女だけの同期会

桜木尚子（13期）

医院を開業しながら生き生きと地域活動をしている女から、引越ばかりでくたびれている女に、今年、久しぶりに電話が来た。共有した時間は都立の三年間、卒業以来会ってもいない。話はあちこちにとびながら、生き生き女の桝本さんが、「会おうか。クラスとっぱらって会ってみようよ」と提案。名簿なんかどこに行っちゃったかなと思いつつ、「じゃヒマだから私が連絡してみる」と答えた。くたびれ女は心の中でエライコト言っちゃったと思っている。これが13期の女だけの同期会の発端だ。

桜井さんに電話をすると、吉沢さん夫婦のホームコンサートによく顔を出すそうで、70人は収容出来るという家もそれ故おもしろいつくりらしい。ICで一緒だった吉沢さんに電話をすると顔が思い出せないと言う。が、「水曜日で良かったら我家でどうぞ」に場所が決まったと大安心。遠くにいる人が来られる日がいい。青森と神戸に手紙を出す、お盆に帰る、これで8月13日に決定。一品持ち寄り、飲物代のみ徴収、あとは電話をしまくるのみ。56年の名簿の転居転居に泣かされながら24年間をうめていく。

明るく都立の生活を送っていたと思っていたのに、都立には成績表はないと頑として三年間親に見せなかった者、赤点をとってしょげた者、大学に行かなかった故に心にキズを持った者、都立には生活のいい人達が多いとコンプレックスを持っていた者…、等々。〝なんだ私だけではなかったのか〟と電話を通して話し込む。仕事を続けている人の多いのにも驚かされる。

当日8月13日、途中で福岡に行ってしまった三原さんも含めて13人が、それなりの年月を身につけて、教育と老後を中心に楽しく時をすごす。就職しようと思ったけれど特待生試験に受かったからと上智に行き、成績が悪くて都立ではコンプレックスのかたまりだったといいながら昭和薬科大に行き、三年で急に絵描きになりたいと思ってと、芸大に行き、学校生活最後の成績は全部Aにしようと青学短大を選んだ、とか過去とこれからの話を聞くうち、〝ウワ、都立大附属の女達は自学自習で、やっぱりすごいや〟と、御近所にきがねしながら雑種の犬三匹をひきつれての引越引越の専業主婦の私には、心の中で、何とかしないとこのままで終わっちゃうと、ただただ非常にあせってしまった、小さな女ばかりの同期会の一日であった。

お詫びとお礼と…

同窓会名簿編集委員　野口貞義（4期）

遅れること10か月余り。同窓会の皆様から「いつ出来るんだ」と度々のお電話をいただき、その都度「もうしばらくお待ち下さい」と、電話口で頭を下げながら、足かけ三年がかりの編集期間をへてようやく、正にようやく、名簿が完成しました。

一昨年行った、第一回編集会議に始まり、お忙がしい中を、校正のたびごとに足を運んで下さった編集委員や、各学年、クラスの役員の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

昭和49年から「3年毎の発行」を目標にしている同窓会名簿も、昭和52年版は順調に出版されたものの、昭和56年版は1年遅れ、今回は、なんと3年遅れの発行となってしまいました。

今年の4月の時点で、37期、180クラス、8、638名という大勢の同窓会となり、頁数も、昭和49年版が187頁のところ、今回は、二倍の368頁という大冊となりました。

今回の名簿の出版に当り、最も困難を来たしたことは、同窓会委員がはっきりとしないクラスがあったことです。そこで、同窓会顧問であった斉先生にお願いし、担当された先生方に当っていただき、協力いただける方を探していただきました。

その斉先生が、原稿整理にかかる直前に倒れられ、逝去されたことは、誠に残念であり、ショッキングな出来事でした。

今回の名簿には、今まで、歌詞だけしか掲載されていなかった、「第4回記念祭歌」の曲を掲載することが出来ました。これは、作詞者の伊藤酒造雄さん（2期）のご提供によるものです。また「第30回記念祭歌」も掲載し、新しいクラブとしては、ゴルフ同好会、サイクリング・サークル、箏曲部が加わりました。

表紙の色は、昭和49年の黄、52年の緑、56年のピンクに続き、今回はブルーにしました。

どうか一人でも多くの会員の皆様にお求めいただき、同期会、クラス会、クラブの連絡にと、ご利用下さい。

最後に、今回の名簿の発行に当り、現、旧教職員名簿の資料と校正に、大変ご協力をいただいた、工藤好吉先生に、厚く御礼申し上げます。